昭和51年12月21日（火）　時事解説　第3種郵便物認可

●外交時評

米ソの対中ゲーム

中嶋嶺雄（東京外語大学助教授）

キッシンジャー氏にかわって、カーター新政権においては、実務官僚型のバンス国務長官がアメリカ外交を担うことになった。一方、北京政変以後、予想されていたとおり、喬冠華外相が「四人組」に連座して失脚し、黄華外相（前国連代表）が出現した。

黄華氏といえば、かつて第二次大戦後、燕京大学時代の恩師であったジェームス・スチュアート・アメリカ大使の北京訪問計画を練り、表向きは反米姿勢を示しながら、裏では当時の中国共産党とアメリカの橋渡しを試みたことが想起される。この若き日の黄華氏の努力は実を結ばず、やがて中国は「向ソ一辺倒」へ走っていったのだが、このような経過があるだけに、単に黄華氏がここ数年、国連代表としてアメリカに滞在していた知米派だということ以上に、アメリカ側の期待は大きいのではなかろうか。

いずれにせよ、カーター政権下ではフォード＝キッシンジャー時代より、対中国関係打開へのテンポが遅れるだろう――という民主党支持のアメリカの中国学者の予想とはちがって、アメリカとしても、米中正常化へのテンポをよりいっそう促進しなければならなくなってきた。いうまでもなく、毛沢東主席の死と北京政変によって中国内政に大きな変化が生じ、中ソ関係改善の可能性という、アメリカにとっては最大の「悪夢」に直面しはじめたからである。

毛沢東主席の死を期に、その後いっさいの中国非難をつつしんできたソ連は、つづく「四人組」失墜というタナボタ式の出来事によって、急きょ対中政策の変更を現実化しつつある。はやくも十月二十九日、例によってソ連の対西側御用ジャーナリスト、ビクター・ルイス記者の黒竜江近辺取材ルポがロンドンの夕刊紙「イブニング・ニューズ」に載り、中ソ国境での和解と友好のムードがかもしだされた。

まもなく、中ソ国境交渉のためにイリイチョフ代表（外務次官）が北京に帰任し（十一月二十七日）、すでに中ソ国境会議が再開されたもようである。ルイス記者はさらにそれに先立って北京政変直後の十月十四日、パリとロンドンの新聞を利用する形でソ連側の対中和解への意思を伝え、しかも、中国の新指導者が「ここ一カ月のうちに」ソ連の和解のシグナルを受けとめ、「共通の言葉」を見いださないなら、ソ連は「不退転の決断」をするとブラフをかけた。

このような経緯のうえに、十月十五日のハーバード大学でのキッシンジャー発言があったのであり、キッシンジャー長官はこうしたソ連の対中ブラフにたいして、きわめて強い対抗的姿勢を示したのである。

当の中国は、李先念副総理のあいつぐ対ソ拒否の発言に示されるように、ソ連の対中和解の呼びかけを拒否する姿勢をとっている（十一月十五日、中央アフリカのボカサ大統領歓迎宴での演説および十二月八日のアブード・ジュニベ・タンザニア第一副首相歓迎宴での演説）との姿勢を示している。しかし、ソ連としては、中国が当面、このようなかたくなな姿勢をくずさないであろうことぐらいは十分に読み込みずみで、今後も執ように対中和解へ向けて、さまざまな戦略・戦術を行使するであろう。

こうして、中国をめぐる米中双方の接近競争がしばらく激化しそうであるが、このことは中国がそれだけ外交能力を高めたことではなく、逆に、その本質は北京がモスクワと手を結ぶのか、それともワシントンにくみするのかという点にあるのであり、北京政変と毛・周両首脳の不在とによって、中国の外交能力が著しく低下したことは否めないであろう。